

アメリカの大学に於ける学生数の男女比率と 学位取得後の待遇の男女格差：1970年から2000年

長 島 敏 子

序 論

私がアメリカ東部で学生時代を過ごした1970年初め、アメリカの大学には既に多くの女子学生が学んでいた。しかし、女子学生数は男子学生より少なく、結婚などの様々な理由で卒業を待たずに大学を辞めて行くのも、女子の方が多かったため、卒業する学生の比率は男子が勝っていた。日本では女子学生亡国論¹⁾なる言葉が世間を騒がせていたが、アメリカでも「女子はMRS学位²⁾を取りに大学へ行く」とか「妻たちの為にPh.T³⁾という新学位ができた」などとマスコミが書き、女子の大学進学を疑問視する意見も多く、社会通念でも男子の大学教育が、より主要の地位を占めていた。

現在、学生たちの留学相談に乗りながら、アメリカの大学ガイドや大学のホームページなど良く目にするのだが、多くの大学で女子学生数が男子学生を超えていることに気づかされる。全カリフォルニア大学でみると、学生数の57%が女子学生だ。大学ガイドブックのピーターソンズ・ガイドによると、NYU（ニューヨーク大学）やBU（ボストン大学）のような有名大学も男女の比率は40%対60%で女子が勝っている。いったいどういうことなのだろう。

この数字は、実社会にどう反映しているのだろうか。国会議員、閣僚、大会

社の経営者や社長，新聞社やテレビ局などマスコミのトップマネジメントなどをみると，まだまだ男性が圧倒的に多いように思われる。

大学での男女数の逆転現象は何時ごろ起こったのか，またその理由はなにか，入学者数と卒業者数の関係はどうなのか，専攻科目や学部での違いはあるのか，女子の学位取得の傾向，学位取得後の進路に違いはあるのかなどに，興味を持ち続けていたところ，私のこれらの質問にかなりの部分において答えてくれるデータに行き着いた。アメリカ政府・教育省の膨大な資料の中に，大変興味深い数値が示されているので紹介したい。

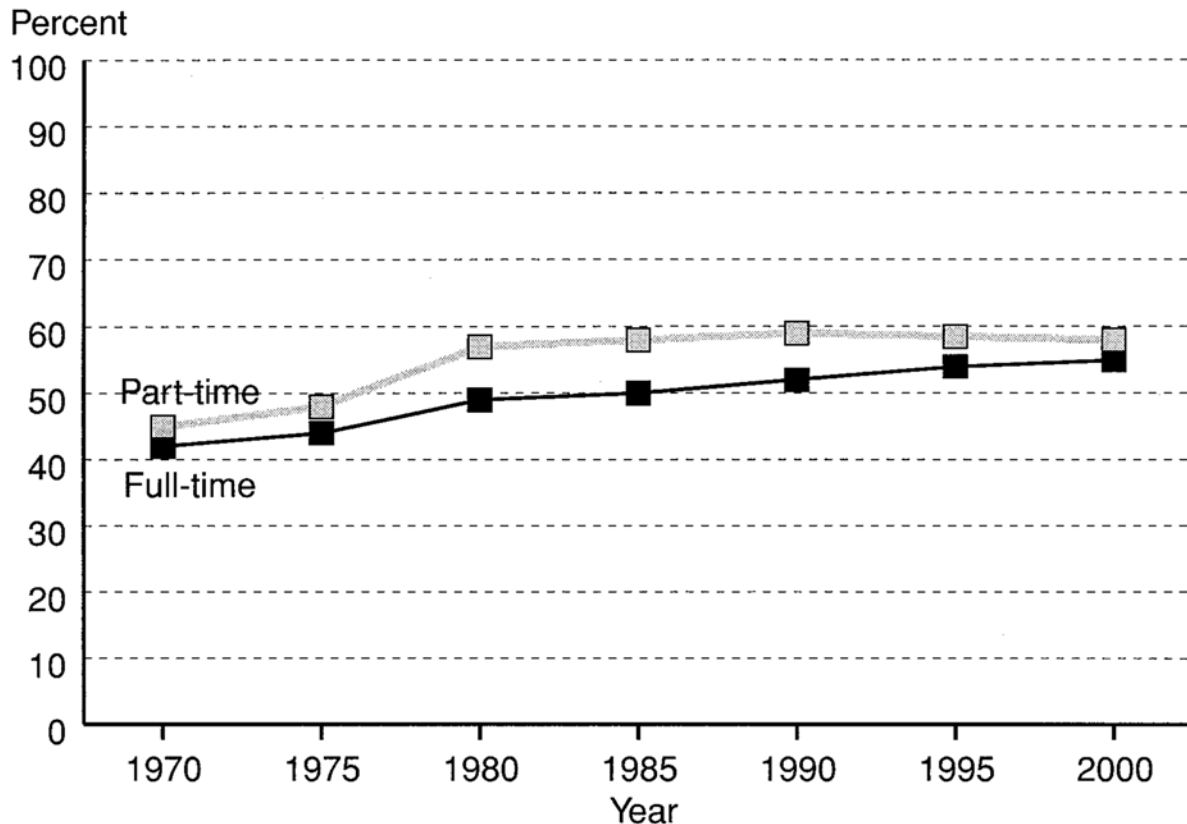
第一章 大学生（学部）⁴⁾ の男女数比率

次のグラフは1970年秋から2000年秋までに，大学に入学した学生の女子の割合を5年毎に示している。1970年には男子学生は全学生の6割近くをしめており，私が在学中「男子学生の方が多かった」と感じた感覚は，あながち間違っ
てはいなかったことが分かる。

1970年には43%で，まだ過半数には至らなかった女子の数は，2000年には57%になっている。パートタイム⁵⁾の女子学生が全学生の半数を越えたのは，1975年前後であり，1985年以降フルタイムの学生も過半数は女子学生になった。2000年にはフルタイム⁶⁾の55%，パートタイムの58%が女子学生であることがわかる。

女子の大学入学比率は1970年から1980年までの10年間で約10%も伸び，その後の5年間で男女学生数の逆転現象が起きた。1985年には女子学生
の数は50%を越え，男子の数を上まわる結果となった。その後，女子の数は安定した上昇傾向を続け，2000年には57%に達している。これは高校卒業後，現役で大学に進学する女子が増えたのが最大の理由だが，大人の女性の大学進学率の上昇も影響を与えている。⁷⁾

資料1：大学における女子の比率



Source : US Department of Education, National Center for Educational Statistics, Digest of Education Statistics 2002.

1950年代～1960年代に公民権運動⁸⁾の洗礼をうけたアメリカは、社会のいたる所で大きな変革が起こった。それらの変革は社会のシステムを変え、人々の考え方にも大きな影響を与えた。公民権運動の副産物の一つである、女性解放運動⁹⁾の波も社会に広く浸透し、女性の意識を高め、社会での女性参画が進んでいった。

1960年代には、東部の有名男子大学も次々と女子学生を受け入れ始め、それらの大学でも、女子の比率は年々高くなっていった。1980年代には経営学修士号(MBA)を持つ若い管理職の存在が話題になり、しだいにその分野にも女子の進出がみられるようになってきた。アメリカのような、多民族社会では、大学の学位取得が成功へのライセンスとして重要視されている。様々な価値観

が混在する社会で、誰もが認め信頼できるものが教育であり、それを証明するのが、学位なのである。

アメリカの大学において男女の数が逆転した1985年は、ソビエト連邦ではゴルバチョフ氏がソ連共産党書記長に就任、ペレストロイカとグラスノスチを進め冷戦の終結と世界平和への道を力強く歩み出した年、日本では男女雇用機会均等法が成立している。

第二章 学士号¹⁰⁾ 取得者の男女数比率 専攻分野別

次頁の図は、1970年と2001年に学士号を授与された女子学生の比率を専攻分野別に表したグラフである。

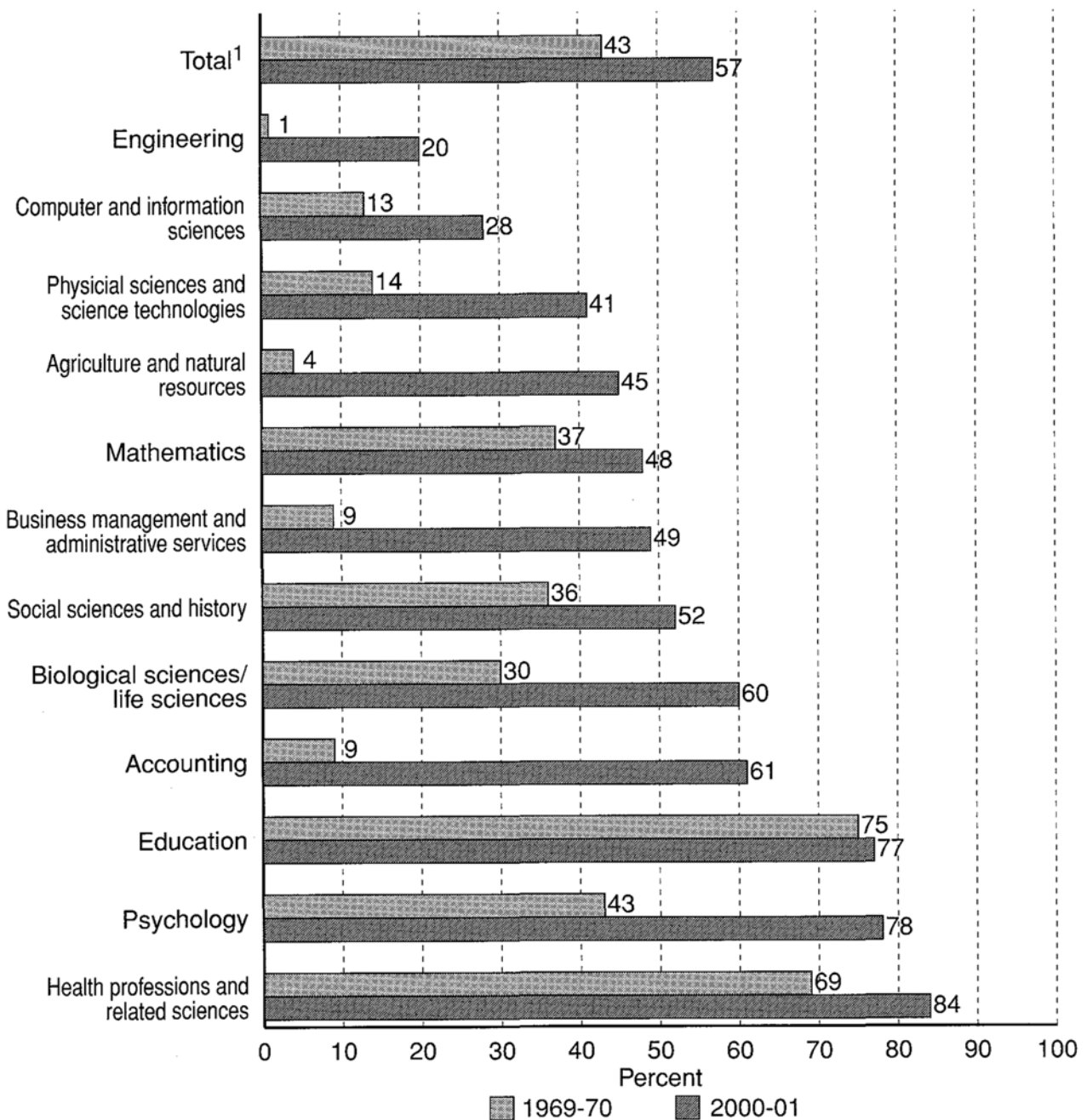
学士号を取得した女子の比率は30年のあいだに43%から57%に増えたことは、前章のグラフでも示されたとおりである。

1970年のデータを見ると、女子学生が男子より多いのは保健衛生学の69%と教育学の75%の2分野のみである。次いで、心理学の43%と数学の37%と社会科学と歴史学の36%があるが、まだ男子学生の半数あまりであった。女子の多いこれらの分野は学士号を取得しても職業の選択が限られ、多くの場合、収入面でもあまり恵まれない分野であった。

男子学生がほぼ100%近くを占めていた分野は、「工学」、「農学」、「ビジネス経営学」、「会計学」で、女子学生は一割にも満たなかった。「コンピュータ・情報科学」の13%と「自然科学・科学技術」の14%が続くが、これらの分野でも女子の数は一割を少々超えたくらいである。男子学生が得意としたこれらの分野は、社会の評価も高く、収入の面でも恵まれていた。

長年変わらなかったこれらの傾向も2001年のデータではかなり劇的な変化が読み取れる。1970年では男子が過半数を占めていた「社会科学・歴史」、「生物学・生命科学」、「会計学」、「心理学」は2001年には女子の学位取得者が男子を越えたのが分かる。これらの伸び率の高さには目を見張るものがある。特に顕著なのは「会計学」で1970年の9%から2001年には61%になっている。

資料 2：女子に授与された学士号 専攻科目別



Source : U.S. Department of Education, National Center for Educational Statistics, Higher Education General Information Survey (HEGIS).

「工学」,「コンピュータ・情報科学」,「自然科学・科学技術」,「農学」,「数学」そして「ビジネス・経営学」は2001年でも,男子学生が過半数を占めているが,1970年の数値と比較すると,女子学生がこれらの分野にも確実に進出していることが分かる。特に,「数学」の48%と「ビジネス・経営学」の49%は次にデータがでるところには過半数を越えている可能性は非常に高い。

この30年のあいだに,女子学生の学部選択の志向は多様化した。長い年月,女子は不得意とされていたビジネスや科学技術の分野にも積極的に挑戦し,それらの分野で立派な成績を上げ,学位を取得している。

第三章 学位取得の男女数比率 人種・民族別

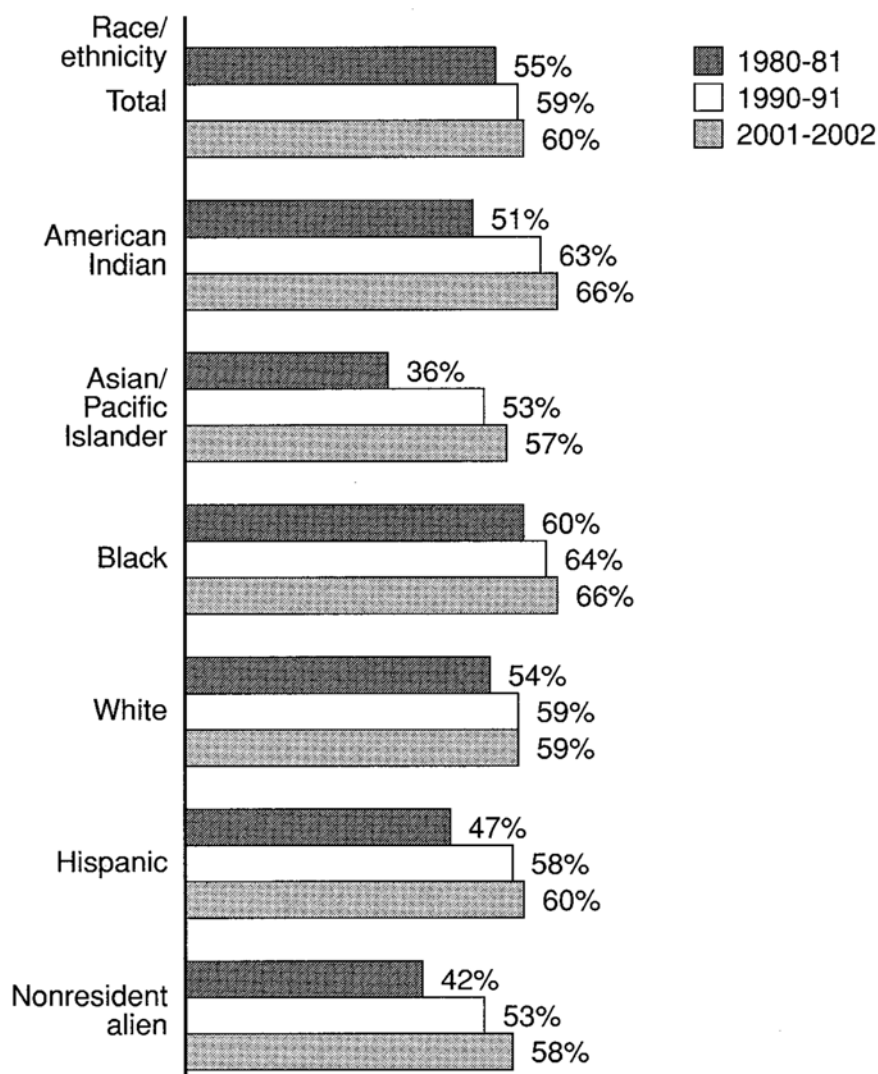
1. 準学士号¹¹⁾

資料3は準学士号を取得した女子学生の割合を人種・民族別に1980年から2001年まで,10年間隔で表したグラフである。

アメリカ合衆国教育省(US Department of Education)の2004年発表の資料によると,2001年に大学に入学した学生数は約1400万人。1980年に準学士号を取得した学生の55%は女子であり,その割合は2001年には66%に上っている。

人種・民族別で見ると,1981年当時,アジア系,ヒスパニック系,外国国籍の学生のグループはまだ男子学生の割合が勝っていたが,1991年には全民族グループにおいて女子学生の割合が過半数を超えた。2001年の割合を見ると,特に顕著なのはアメリカ先住民系と黒人系の学生で,準学士取得者の66%,実に3分の2が女子である。

資料 3：女子に授与された準学士号 人種・民族別

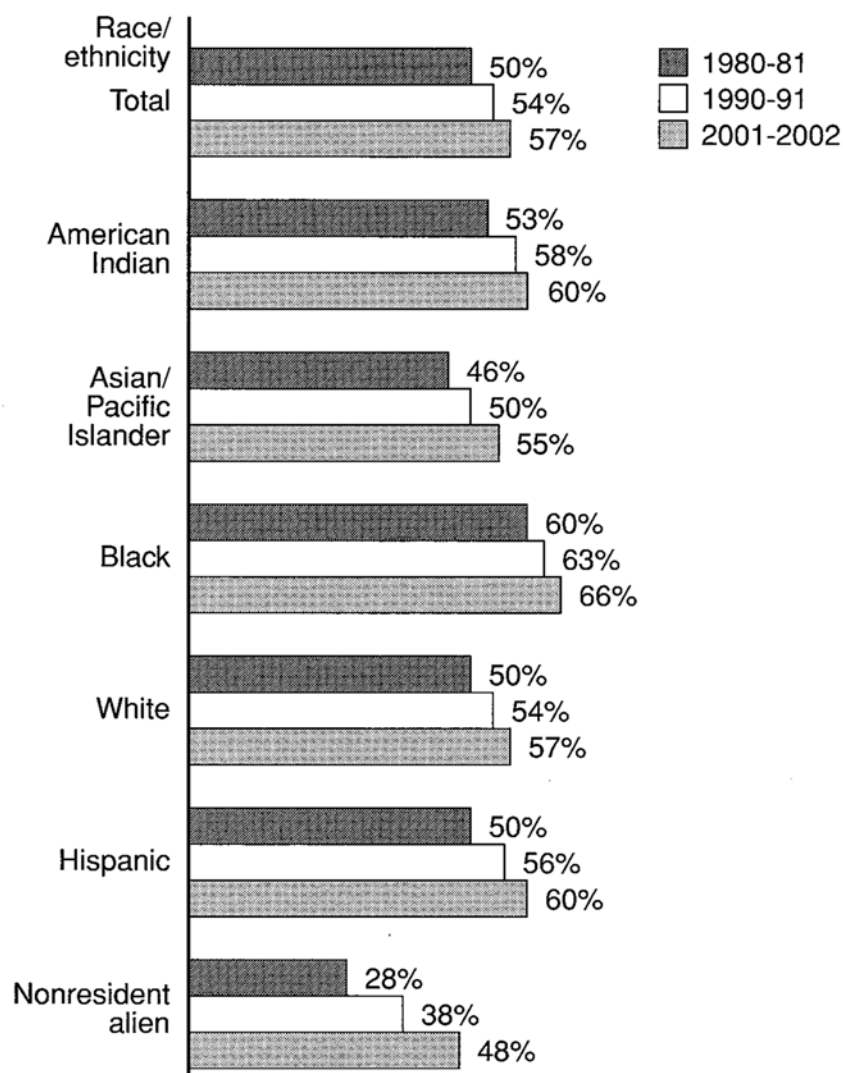


Source : U.S. Department of Education, National Center of Education Statistics (NCES). (2004). Digest of Education Statistics 2003 (NCES 2005-025), table 261

2. 学士号

資料 4 は学士号を取得した女子学生の割合を、人種・民族別に1980年から2001年までを10年間隔で表したグラフである。

資料4：女子に授与された学士号 人種民族別



Source : U.S. Department of Education, National Center for Education Statistics (NCES) . (2004) . Digest of Education Statistics 2003 (NCES 2005-025) , table 264

4年課程修了の学士号では、準学士と比較して女子の数は若干低い割合になってはいるが、資料1と資料2でも明らかなように、1970年には43%に、そして1980年には丁度半分の50%に達し、2001年には57%と伸びている。学士号でも女子学生の割合が高いのは、黒人系で、66%に達している。平均値の57%以

上なのは、60%のアメリカ先住民系とヒスパニック系。白人系は、1981年50%、1991年54%、2002年57%と合計の平均値と同割合を示している。

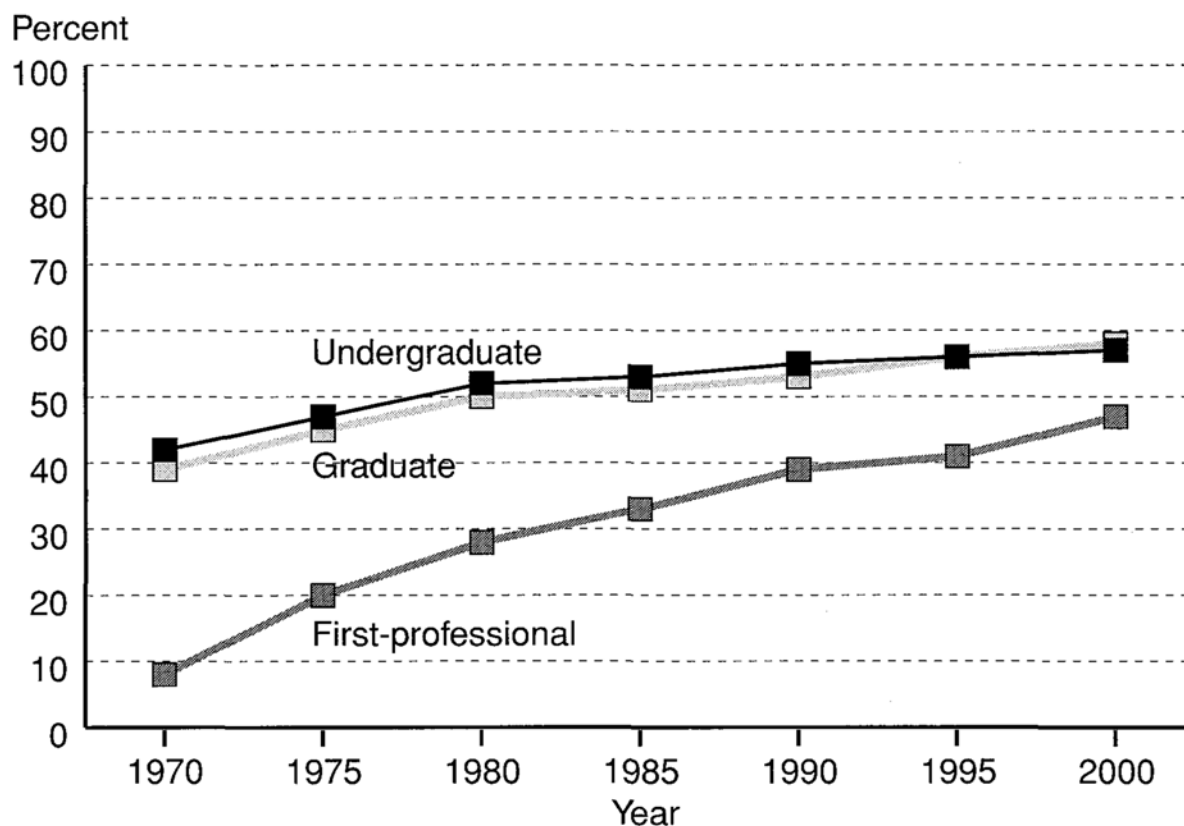
1981年で、唯一50%以下であったアジア系学生も1991年には50%に達し、その後、アメリカの大学における学位取得率は女性が過半数を超え、その割合を伸ばしている。

第四章 大学、大学院、大学院レベルの

プロフェッショナル・スクール¹²⁾ における男女数比率

下の資料5は大学、大学院、ファースト・プロフェッショナル・スクールにおける女子学生の比率を表している。

資料5：女子学生比率：大学・大学院・専門大学院



Source : US Department of Education, National Center for Educational Statistics, Digest of Education Statistics 2002.

資料5のグラフからも明らかなように、大学院での女子の比率は学部的女子と殆ど同じ割合で伸び続け、1970年には39%で学部的女子の比率より少々低かったが、1980年には半数に達し、1995年前後には学部の比率を超え、2000年には、全大学院生の58%は女子学生になっている。

法科大学院や医科大学院などの専門大学院では、2000年時、まだ男子学生が過半数を占めている。しかしながら1970年には10%以下であった女子学生の割合は2000年には47%にまでなり、その曲線は30年間の劇的な増加傾向を示している。

第五章 学士号取得後の就職状況男女比較

次の図は大学卒業後、一年以内に就職した者の雇用状況とその男女の比率を示している。比較データは1993年と2000年の大学卒業者である。

資料6： 学士号取得後の就職状況

	<u>Employment Status</u>				
	<u>Working</u>		<u>Not Working</u>		
<u>Gender</u>	<u>Total</u>	<u>Full Time</u>	<u>Part Time</u>	<u>Unemployed</u>	<u>Out of Labor Force</u>
<u>1992-93 Bachelor's Degree Recipients</u>					
Male	86.4	75.1	11.3	4.8	8.8
Female	87.3	71.5	15.8	4.4	8.4
<u>1999-2000 Bachelor's Degree Recipients</u>					
Male	89.3	80.5	8.9	5.9	4.8
Female	86.1	73.6	12.5	6.3	7.6

Source : U.S. Department of Education, National Center for Educational Statistics,
1993/94 and 2000/01 Baccalaureate and Beyond Longitudinal Studies

大学卒業後、一年以内に就職している学生の割合を1993年で見ると、男子が

86.4%で女子が87.3%，2000年では男子は89.3%，女子は86.1%であった。

男子は，2.9%の伸びを示したが，女子は1.2%の減となった。特に正社員として働いている割合は，男子80.5%で5.4%の伸びを示したが，女子は73.6%で2.1%の伸びに留まっている。パートタイマーの男子は11.3%から8.9%になり2.4%の減少。女子も15.8%から12.5%になり，3.3%の減少になったが，男子より3.6%も多く，女子がパートタイムの仕事についている割合は多いことが分かる。

失業中の数字には男女の違いはあまり無いが（女子6.3% 男子5.9%），女子は4.4%から6.3%に増えている。または働いていない者の割合も7.6%と女子が多く，男子の4.8%と大きな対照をなしている。

第六章 学士号取得者の専攻分野別平均年収額の男女比較

学士号を取得後一年以内に就職した，男女の年収を比較したのが，下の資料7の表である。

資料7： 学士号取得者の平均給与 専攻分野別・男女別

Average Annual Salary (US\$)			
<u>Gender and Undergraduate Field of Study</u>		<u>1994</u>	<u>2001</u>
<u>Total</u>			
Male		32,500	39,400
Female		27,400	32,600
<u>Business/Management</u>			
Male		33,600	42,300
Female		29,900	39,000
<u>Education</u>			
Male		35,100	29,600
Female		21,900	28,100
<u>Engineering, Mathematics, and Science</u>			

Male	33,300	45,200
Female	27,900	34,200
<u>Humanities and Social/Behavioral Science</u>		
Male	27,300	34,600
Female	26,500	29,400
<u>Health, Vocational/Technical, and other</u>		
<u>Technical/Professional Fields</u>		
Male	35,400	38,100
Female	30,300	34,300

Source : U.S. Department of Education, National Center for Education Statistics,
1993/97 and 2000/01 Baccalaureate and Beyond Longitudinal Studies

1994年と2001年を比較してみると、女子はいずれの年も男子より低い年収になっている。1994年の男女差は5,100ドルで、女子の収入は男子の84%にとどまっている。2001年の差は6,800ドルと更に開き、女子の収入は男子の83%となり給与差は更に広がっている。

大学での専攻分野でみても、いずれの分野でも男子の方が女子よりも高収入になっている。例えば従来から男子学生の多かった「工学・数学・科学」系の男子の学位取得者は1994年には33,300ドルを得ていたが、2001年の統計では45,200ドルに増え、女子との格差は11,000ドルに広がった。また、女子の活躍の場であった教育学の分野では、男子の年収は1994年から2001年までの数年の内に6,500ドルも減ったが、それでもまだ女子よりも1,500ドルも高いことが分かる。

残念ながら、教育機関で女子が積み上げてきた実績と成果は、実社会の待遇にまだ十分反映されていないようである。大学はいつも最もリベラルな場所で、社会へ新しい風を送り続け、新しいことや変化にも敏感に対応するが、実社会では男女の格差が厳然として存在している。実社会の保守性が大学に追いついてくるには、もう少し時間が必要なのかもしれない。

結 論

現在、アメリカでは、男性よりも多くの女性が大学教育を受け学位を取得している。女子が男子の数を超えたのは1985年頃で、2000年のデータでは女子の比率は57%になっている。女子は勉学への目標を明確に持ち、意識も高く、真面目に勉強している。高校卒業後も現役で大学進学を果たし、男子よりも早いペースで学位取得を果している。女子は学士号だけに留まらず、修士号でもさらに多い58%を占め、アメリカの大学が授与する学位の、過半数以上を女性が取得している。しかし、専攻分野にはまだ若干の男女の偏りは残っている。

女子学生数は「コンピュータ科学」、「工学」、「自然科学」などの分野ではまだ過半数に達していない。また、「医学・法学」などの専門大学院や博士課程を究める女性の数は男性を下回るが、この30年間で男女差は確実に狭まり、性差の解消に近づいている。

大学に在籍し学位を取得する女子の数は過半数を超えた。子育てをしながら、大学に進む女性も多く、より給料の高い仕事に就くために一度社会に出たが、大学進学に挑戦する低所得者層の女性も多い。アメリカの大学は、様々な学生のニーズに対応するべく、パートタイム制度やセメスター毎の履修登録制度など、学生が学びやすいシステムを提供している。

高校での女子の意識も大きく変化した。NCES (National Center for Educational Statistics) の“High School Academic Intensity of 1982 and 1992”のデータによると、勉学に真剣に取り組む女子が増え、成績面でもまた履修する科目のレベルにおいても、男子をしのぐようになっている。1982年の大学進学者では男子の成績が女子を上回っていたが、1992年には成績差はなくなった。女子は高校時代から、男子より高い理想と目的を持ち、大学進学を果たしている。

女子の大学学位取得率の高さの原因の一つに、女性解放運動が考えられる。1960年代まで、アメリカ女性は理想の女らしさを家庭に求めた。若い女性の憧

れは郊外の素敵な住宅に住む、中流家庭の主婦になることであった。そして教育を受けた女性ほどその意識は強かった。早く結婚し、夫のために美しくし、家庭を守り子供たちを育て、妻として母として社会とかかわることだった。しかし、女性解放運動が自信の無かった女性たちを目覚めさせ、そっと背を押した。それまでの女性が夫に自らの人生を託したのと異なり、女性自ら、自分の夢・人生を生きてみたいと思うようになってきた。そして自立できる能力を備えることを強く希望し、それを可能にするのが教育であると理解した。大学の学位が社会の成功へのライセンスとして更に認識されてきたと考えていいのではないか。

もう一つは、女性は元来学ぶことが好きなのではないかと思う。学問は女性の得意分野だといえるのではないか。日本でも、最近家庭の主婦や一度就職を経験した女性の大学進学や大学院進学が話題になっているが、アメリカにおいても、年齢の高い女性や家庭の主婦層の大学入学が増えている。1999年－2000年を例にとると29才以上の学生の60%は主婦層である。

そして最後に、アメリカのような多民族・多宗教・多価値観の国家には、それぞれの違いを乗り越えて、皆で共有するルールが必要である。法律はその一つであるが、教育も大きな一つなのだと思う。社会が大学教育を認め、学位が個人を認める確かな資格として通用している。長い間男性中心で回っていたアメリカ社会に参画していくために、後発の女性にとって、社会参加に必要不可欠なものが、社会が認める学位というライセンスなのであろう。

女性の大学での躍進はめざましいものがある。女性の社会参加への第一のバリアは打ちくずされたと云える。しかし、実社会に大きく立ちはだかっている待遇面での男女格差は、想像以上に大きいことが分かった。収入の男女格差の完全解消にはまだまだ時間が必要のようである。かつて、アメリカの家庭では男子に、女性のためにドアを開けるよう教えたそうである、しかし今21世紀の男子には、女性のために会社の役員室のドアを開けなさいと、教える必要がありそうだ。

(注)

1) 女子学生亡国論

1961年、当時早稲田大学教授であった暉峻康隆氏が『週刊新潮』で「文学部は女子学生に占領されて、いまや花嫁学校化している」と当時急激に増え始めた女子学生を皮肉ったコメントをし、その後『婦人公論』など女性誌を中心に議論が活発化した。

2) MRS学位

Mrs. (夫人) は既婚女性を表す。つまり、女子の大学進学理由は勉強するためでも、就職のための学位取得でもなく、結婚相手を見つけるためだ、と女子の大学進学を軽笑した。

3) Ph.T (Putting Husband Through)

Ph.D (博士号 Doctor of Philosophy) をもじったもの。夫の学位取得を優先するために、自らは大学を中退したり、働いて家計を支えたりする女性が多かった。

4) 学部

アメリカの大学 (university) は学部 (undergraduate school) と大学院 (graduate school) とその他の専門大学院 (professional school) から成っている。一般には学部だけの大学をカレッジ (college), 大学院を併設している大学をユニバーシティー (university) と呼ぶが、大学名には色々あり、必ずしも一様ではない。

5) part-time student

大学が定めた必要履修単位以下を履修する学生のこと。働きながら学位取得を目指す勤労学生の外、社会人、家庭の主婦、退職後の中高年の人も多く、学位取得を目指さない学生もいる。full-time と part-timeの違いは夜間部と昼部などの時間の違いではない。

6) full-time student

大学で1学期に履修すべき必要単位を履修し、学位取得を目指している正規の学生のこと。ちなみにF-1 (留学生ビザ) の学生はfull-time のみで、part-time statusは認められていない。

7) NCES 2003-060

8) 公民権運動

第二次世界大戦終了後から1960年代末にかけて活発に行なわれたアフリカ系アメリカ人を中心とする運動。1955年のローザ・パークス女史がきっかけをつくった、アラバマ州モンゴメリーのバスボイコット運動やキング牧師が指揮した1963年8月28日のワシントン大行進などの成功の結果、1964年当時のジョンソン大統領が公

民権法に署名した。

9) 女性解放運動

公民権法は人種，肌の色，宗教，出身民族だけでなく性をも根拠とした差別を違法とした法律である。公民権法の制定が，それまで無知であった女性を目覚めさせた。女性たちは男女平等権修正条項の批准促進を訴え，雇用，教育，マスメディアなどの女性の平等を目指し立ち上がった。1960年後半から1980年にかけて，多くの女性が運動に参加した。

10) 学士号

Bachelor's Degree という。一般に Bachelor of Arts (BA) と Bachelor of Science (BS) の学位がある。

11) 準学士号

Associate of Arts Degree (AA) という。2年制の課程が多い。

12) プロフェッショナル・スクール

First-professional Schoolとは，各種医科学大学院や法科大学院，神学大学院のような大学院レベルの最高専門教育機関のこと。アメリカでは，これらの専門課程は，すべて、大学院レベルで修得することになっている。

参考文献

Compiled and Edited by the College Division of Barron's Educational Series, *Barron's Profiles of American Colleges; Descriptions of the Colleges*, Barron's Educational Series, Inc., New York

Friedan, Betty, *The Feminine Mystique*, Dell Publishing Co., Inc., New York: 1963

長島敏子「スーザン・アンソニーからヒラリー・クリントンまで—19世紀～20世紀のアメリカ女性史—」『創価女子短期大学紀要』第20号 171-190

ホーン川嶋瑤子 『女たちが変えるアメリカ』岩波新書 東京 1998

Streep, Meryl, *University of New Hampshire Commencement Address*, Durham, New Hampshire: 2003

URL

Gender Differences In Participation And Completion Of Undergraduate Education And How They Have Changed Over Time

<http://nces.ed.gov/das/epubs/2005169>

Trends in Educational Equity of Girls & Women: 2004

<http://nces.ed.gov/pubs2005/equity>